都藝泥布

京都地名研究会　会報　第 56 号
平成 28 年 12 月 21 日発行
題字「つぎねふ」（山城の枕詞）
揮毫　吉田 金彦氏 （本会名誉会長）
編集　京都地名研究会事務局

第 44 回地名フォーラム報告

第 44 回地名フォーラムが、さる 10 月 23 日（日）に木津川市のアスピア山城で開催された。綱本会長の開会挨拶の後、講演と二つの発表があった。参加者は会員 25 名、一般 8 名、会員外発表者 1 名計 34 名であった。司会は山口　均常任理事。

参加者の拡大を目指して今後ともご協力をお願いしたい。以下に講演と各発表の要旨を掲載する。

講演

難読地名・一口(いもあらい）再考

～地名研究の落とし穴～

本会常任理事　小寺　慶昭

難読地名として全国的に有名な一口の地名語源説として、多くの書物に「疱(いも）洗い説」が紹介されている。この説は、次の三段論法で構成されている。

（小寺　慶昭氏）

①江戸の一口稲荷社(現在の玉姫稲荷社）は疱瘡や瘡を防ぐ神として信仰されてきた。

②江戸の一口稲荷社は、久御山東一口の稲荷社(豊吉稲荷）から勧請した神社である。

③よって、豊吉稲荷社は疱瘡除けの神であり、一口も「疱(いも）洗い」の意味である。①②は玉姫社に伝わる伝承からきている。小野篁が東一口に建てた疱瘡除けの神を太田道灌が勧請したという。しかし、篁の話は地元には伝わっていないし、そもそも、道灌の時代に東一口村そのものが存在しなかった。伝承は伝承として大切にされるべきだが、歴史と混同した点に問題がある。特に、地元の調査を充分にせず、「のはずだ」との推論のみで考察したところに「落とし穴」があったと言えよう。また、「勧請」の捉え方にも誤解がある。江戸時代には、「イモアライ」という音に「疱洗い」を重ね合わせ(言霊信仰）、勝手に勧請するということもあり得たのだ。

近年、地元の教育委員会が建てた看板に、「漁業の“ケガレ”を忌み(斎）祓う場」(イミハライ→イモアライ）という説が書かれている。確かに、地元にも伝わる「弥陀次郎伝承」は、漁業を忌んだ次郎が農民に変わる話だが、結局は次郎が木幡の西方寺に移らざるを得なかったことからも分かるように、一口では受け入れられなかった教えである。魚の霊を慰霊することはあっても、漁民たちは誇りを持って漁業に従事したのであり、豊吉稲荷社も豊漁の神様でもあった。「漁業＝忌むべき生業」との前提の是非を検討しなかったところに、この説の「落とし穴」があったと言えよう。

一口が特殊なのは、「一口」という表記と「イモアライ」という読みが結合したことにあって、「イモアライ＝芋洗い」と素直に理解するのがよい。ま

た、「一口」という表記も、他地域に見られるように「出口が一つの場所」と理解したい。

（小寺　慶昭記）

発表１

相楽の「惣村」と地名をめぐって

城南郷土史研究会代表　中津川　敬朗

（中津川　敬朗氏）

地元研究会での討論をもとに、資料の豊富な興福寺領狛野荘についてその事例を報告した。

この地は、大狛、上狛野、狛野など古代地名が中世に引き継がれてきたが、「上山城の椿井の上山に新たな城を構える」というように、国人椿井氏の住所が地名として表現され、今日の「椿井」となり、同じく「高林の在所」が今日の「林」となったように、国人の在所が今日伝えられている例がある。

江戸時代初頭の村文書には惣の活動が記録され、狛野荘南北両荘は上狛南村、同椿井村、惣を運営する神人衆の地域も、今日に続く野日代、小仲小路など地域共同体の活動の地域名として生まれている。『大乗院寺社雑事記』に見える名主の代表「番頭（ばんがしら）」の名は、松尾社の拝殿の棟木銘文に記され、今日の地域割りの「番区」として生きている例もある。

南村では、明治になって行政が新しい字名を策定したが、それは今日も住所表記にしか使われていない。

国人との関連地名や、地域住民の共同体以下ツメル活動の地名、地域名は、惣村の時代にその基盤が形成され、人々の生業や暮らしの発展の中で伝えられてきた。この地では住所表記とは関係のない地名、地域名として共同生活の全体にわたって生きている　　。

（中津川　敬朗記）

発表２

蟹満寺と雪野寺から綺田の地名を考える

本会常任理事　　中島　正

（中島　正氏）

京都府南部の南山城地域には、飛鳥・白鳳創建寺院が稠密に分布し、渡来系氏族が多く居住する地域でもあった。これら寺院のほとんどは現在、廃寺となっているが、発掘調査で出土あるいは表面採集による古瓦の様相から、７世紀後半の白鳳期に伽藍整備が大きく進展したことがわかる。この時期に、南山城の拠点寺院となるのが、木津川市の高麗寺と蟹満寺である。両寺では、大和川原寺の創建瓦である川原寺式軒丸瓦を直接の祖型として独自に生み出された高麗寺式の軒丸瓦を用いて伽藍整備がなされており、この型式と同系列の軒丸瓦（高麗寺式）が南山城で顕著に分布するのである。

そして、南山城から遠く離れた、滋賀県の琵琶湖東岸の東近江市に所在する雪野寺からも、この高麗寺式軒丸瓦が出土する。雪野寺が所在する湖東地域は、南山城同様、飛鳥・白鳳創建寺院が稠密に分布し、渡来系氏族が盤踞する地域であった。しかも、都が大和にあった時期、湖東地域は東山道を介して南山城とつながっていた。このルートの結節点となるのが、現在の綴喜郡宇治田原から大津へをぬける「猿丸峠越」の田原道であり、その近傍には、やはり高

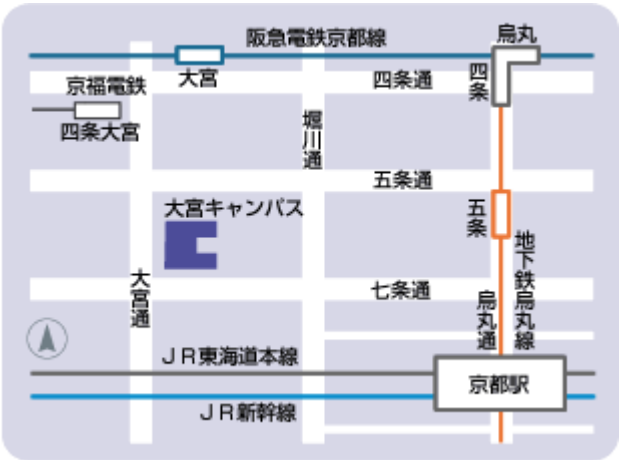
麗寺式軒丸瓦をもつ山瀧寺があるのである。ここに、山科盆地から「小関越」で大津へぬけるルートとは別の、南山城と湖東の古代寺院を直接結びつける道があったのである。

ところで、白鳳期の南山城の拠点寺院であった蟹満寺が所在する木津川市山城町「綺田」の地名が、湖東の雪野寺近傍の佐久良川沿いにも存在する。現在は東近江市となっている旧蒲生町「綺田」の通称寺村には、栩原綺田神社境内周辺に白鳳寺院としての綺田廃寺がある。両地名がともに古代豪族・綺連氏（新撰姓氏禄（和泉國神別）津守連同祖。天香山命之後也。）と関連するならば、白鳳期の古代寺院と古代豪族が南山城と湖東の地で結びつくことになるのである。

天智朝における大津宮遷都（667 年）を前後する時期、激動する半島情勢にあって、蟹満寺と雪野寺の比較を通して、綺田の地名を考える意義は大きいと考える。

（中島　正記）

第 45 回地名フォーラム　会場案内図



第 45 回地名フォーラム開催案内

日時

2016年１月22日（日）

PM 1:30～ PM 5:00

会　場　龍谷大学　大宮学舎

清和館大ホール

京都市下京区七条大宮東入ル

研究発表

発表１

地名から仏教揺籃の地の南大阪を掘り起こす

本会常任理事　桃山学院大学教授

梅山　秀幸氏

発表２

京の七口

本会会長

綱本　逸雄氏

発表１

キーワード：仏並、池辺氏、納花、光明池、縣犬養

【略歴】

梅山秀幸（うめやま　ひでゆき）

1950 年生まれ、京都大学文学研究科博士課程単位取得修了。現在、桃山学院大学国際教養学部教授。2007 年 10 月～2008 年 9 月、2015 年 4 月～2016 年 3 月コレージュ・ド・フランス招聘研究員。著書に『かぐや姫の光と影』（人文書院）『後宮のものがたり』（丸善出版部）、翻訳書に『於于野譚』『太平閑話滑稽伝』『櫟翁稗説・筆苑雑記』『慵斎叢話』など。略歴トル

発表２

キーワード：鞍馬口　大原口　荒神口　粟田口　三条口　伏見口　五条口　竹田口　東寺口　鳥羽

口　丹波口　長坂口

【略歴】

綱本 逸雄 (つなもと　いつお)

1941 年生まれ。京都地名研究会会長。近畿大学理工学部卒。著書『京都三山石仏・石碑事典』（勉誠出版、2016）、『京都盆地の災害地名』（勉誠出版、2013）。共著に『地名が語る京都の歴史』（東京堂出版、2016）、『京都地名語源辞典』（東京堂出版堂、2013）、『京都の地名検証 1～３』（勉誠出版、2005～2010）、『日本地名学を学ぶ人のために』（世界思想社、2004）、『大阪地名の謎と由来』（プラネットジアース、2008）、『奈良の地名由来辞典』（東京堂出版、2008）、『京の歴史･文学を歩く』（勉誠出版、2008）、『日本地名ルーツ辞典』（創拓社、1992）、『語源辞典植物編』（東京堂出版、2001）ほか。

地名随想 1

北山の山名（５）

小寺　慶昭(本会常任理事)

北山をこよなく愛した金久昌業氏(1922～82）の名著『北山の峠』(全三冊・1978～80 刊・ナカニシヤ出版）には、北山の峠名が 104 か所も記されている。その中で、本稿で定義した北山の範囲に入る峠は丁度 100 を数えるが、それらを京都の市街地にほぼ近い順に並べると、次のようになる。

上ノ水峠･長坂峠(京見坂）･氷室道･ダラ坂･満樹峠･松尾峠･榧ノ木峠･ウジウジ峠･ダルマ峠･首無地蔵(サカサマ峠）･北舎峠･寒谷峠･横川越･夜泣峠･薬王坂･江文峠･仰木峠･伊香立越･八丁坂･百井峠･杉峠･花背峠･滝谷峠･柳谷峠･旧花背峠･芹生峠･魚谷峠･持越峠･岩谷峠･薬師峠･供御飯峠･河原峠･余野坂･雲月坂･縁坂峠･芦見峠･星峠･渋坂峠･柿ノ木峠･貞任峠･人尾峠･蝿野坂･伏見坂･茶飲峠･大谷峠(河内越）･ジョーラク峠･祖父谷峠･ナベクロ　峠･石仏峠･井戸峠･雲取峠･寺山峠･見谷峠･花折峠･小野谷峠･フジ谷峠･オグロ峠･寺谷峠･鍋谷峠･卒塔婆峠･衣懸峠･ドラゴシ峠･四郎五郎峠･品谷峠･ダンノ峠･佐々里峠･深見峠･知谷峠･神楽坂･海老坂･肱谷坂･鏡峠･仏主峠･犬越峠･大栗峠･洞峠･丹波越･叫越･クチクボ峠･野田畑峠･杉尾坂･権現坂･知井坂･棚野坂･堀越峠･横尾越･根来坂(針畑越）･木地山越･池ノ河内越･駒ガ越･尼来峠･尼公坂･道木谷峠･石田坂峠･福谷坂峠･胡麻峠･鬼住峠･近江　坂(能登越）･粟柄越･黒川峠「花背峠」「百井峠」のように、村の名をかぶせた峠名も少なくない。これらの村名は目的地としての「花背(百井）へ行くための峠」であり、「花背(百井）から来る峠」ではない。同じ事は、各地に見られる「愛宕道」にも言えることである。

山を歩いていると、谷を詰め、最後に一気に標高を稼いで峠へ出る道が多いとの印象を受けるが、実際には「○谷峠」という名称は 15 か所しかない。多分、荷物を運搬する際に峠の手前の直登がネックとなるため、早くから支稜線に取り付き、ジグザグ道で傾斜をより緩やかに平均化し、重い荷物も持ちこたえやすくする道が多かった結果であろう。それだけ、多くの物資が行き交ったとも言える。

さて、「○越」が 14 か所、「○坂」が 17 か所、若狭との国境を中心に多く見られるのが注目される。

日本で最も標高の高い峠道は、北アルプスの名峰

・槍ケ岳と大喰岳の間にある約 3000mの鞍部で、飛騨乗越(のっこし）と呼ばれる。信州の名山・岩菅山にあるノッキリも、その変形とされる。川端康成の「伊豆の踊子」が越えていくのは「天城越え」。「越(こし・こえ）」と「峠」との違いについては色々な説があるようだが、「越」の方が古い言い方と考えられないだろうか。少なくとも、北山では市街地から遠く離れた所に多く残っているように思える。そして、その地域こそ、「○○峠」という山名が集中している場所でもあるのだ。　(つづく）

地名随想２

比良・八淵の滝の文字石

綱本　逸雄（本会会長）

滋賀県高島郡高島町黒谷に比良山系・八淵の滝がある。『近江輿地誌略』（寒川辰清、1734 年）に、「八池瀧　畑谷の上、八池山に在り因て瀑布の名とす。大小二瀧あり、大瀧三丈許、小瀧二丈許。蓋云ふ瀧の落つる壷八有り、故に八池瀧といひ又山名とすといふ」とあり、滝が八つあるところからの名称である。『高島郡誌』（高島郡教育会、1927 年）には「滝は八折をなし其落つる所には各淵あり、これ八池（旧八池と書せり、今淵の字を用ひるは幕末の頃漢詩を好む者の用ひ初めしなり）の名ある所以なり、往古は山霊の怒に触れんことを怖れて外来の客を誘ふことを禁じたり」と記す。八滝の一、「七遍返瀧」では「往時旱魃の際は農民此瀧に至りて酒饌を献じ、神主が雨乞の祈祷を」行った。

幕末には京師に景勝地として知られ、文人・歌人が訪れて称えた。安曇川町青柳出身の歌人・中江千別も特産品・高島硯を行商するかたわら、本居宣長の弟子・村田春門らと親交があったが、「足引きの御山もさやにとゝろきて大すり鉢に落る瀧つせ」と詠んでいる。

八つの滝というのは、下流から魚止の滝、障子ケ滝、空戸の滝、大摺鉢、小摺鉢、屏風ケ滝、貴船の滝、七遍返の滝をいい、今日ではこの渓流は関西でよく知られたハイキングコースとなっている。大摺鉢は甌穴（ポット・ホール）といわれるが、岸辺に畳二枚分ほどの自然石（石質・花崗岩）があり、側面に漢字二文字が陰刻されている（写真）。

この文字について巷間、「『八渕』と隷書で、判子の様に、逆さに彫ってある」とか、「八徳」だが、「八徳」は国語辞典に「仁義礼知信忠孝悌の八種の徳目の称」とあるので、これを指すとかいわれている。しかし、このような説明は「滝」と結びつかない。

戦後、この漢字二文字について、「八徳」だと比較的早く指摘していたのは、『高島の民俗』第 5 号（高島町文化協会、1979 年 9 月 1 日）だろう。「『八徳』のいわれ」と題して、同町黒谷の岸田藤治氏の一文が載る。

それによると、「（大正時代）当時の滋賀県知事であった堀田という人が、八ツの渕の『滝』の徳をこの大岩に念じたといい、（同町の）石屋が彫った」という。当時の知事については『湖国百選　石・岩』（1991 年 3 月、滋賀県企画・発行）がもう少し詳しく紹介している。

同書「八淵の滝八徳石」の項に、この滝は「日本の滝百選」に選ばれたが、「『八徳』と篆書体の文字で刻まれています」とし、1922 年（大正 11）堀田義次郎滋賀県知事が視察した時、「八淵の滝の徳を念じて筆をとったものを、石屋が彫った」と記す。残念なことに、掲載写真は、「徳」の行人偏が右側に彫られているので、文字が左右逆と思ったらしく、ご丁寧に表裏反対（裏焼き）にして載せミスを犯している。また、「八徳」の意味については高島町歴史民俗資料館でも不明としている。

○●受贈図書及び資料●○

伊賀の國地名研究会

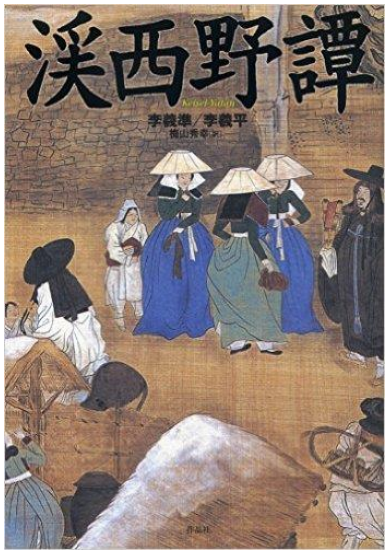
「いが地名考」（「読売新聞・伊賀版」に連載）
251 回～300 回（2016 年）

滋賀民俗学会　発行

◇『民俗文化』第 637 号（2016 年 10 月発刊）
（お送りくださった関係機関に感謝いたします）

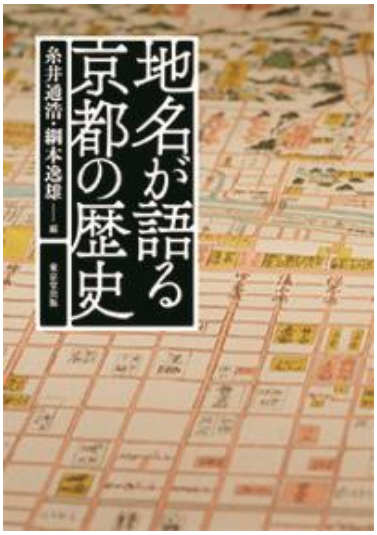
□ **会員出版物紹介** □

『渓西野譚』　作品社　　李 羲準・李 羲平（著）
梅山 秀幸（翻訳）



19 世紀初め、李朝末期、動乱の歴史に飲み込まれていく朝鮮社会の裏面を描いた歴史的古典。社会は爛熟し、新たな胎動が始まる一方で、宮廷は「闘争」に明け暮れていた。本書 312 篇の説話には、支配階級の両班、多様な下層民の姿が活写され、朝鮮の国家・民族のアイデンティティを模索する過程を読み取ることができる。本会常任理事梅山秀幸氏が翻訳された。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇



『地名が語る京都の歴史』　　東京堂出版

綱本　逸雄・糸井通浩　編

第１章 平安京以前（古代氏族の勢力分布、木簡にみる山背の郡郷、平安京周辺の条理と地名、桓武登場と長岡京造営など）

第２章 平安王朝時代（条坊制―大路小路の整備、平安京起源の地名、平安京の周縁、歌枕の成立と文学にみる地名　など）

第３章 武士・庶民の躍動　鎌倉・室町前期（武家政権と六波羅、京の「口」地名と街道、祇園御霊会と町衆の躍動など）

第４章 天下人の時代（西陣の起こり、町の形成と町名、秀吉の都市改造、伏見城と城下町の建設、南蛮文化と地名など）

第５章 近世文化都市の興隆（災害と町づくり、寺社の整備と信仰の組織化、名所・名勝めぐりの庶民化など）

第６章 幕末から現代へ（京都の再出発ー近代化への道、鉄道地名の発生、戦争と京都、行政区の整備と拡大など）

地名にはその土地の歴史が刻まれている。本書は京都の現代にも残る地名や歴史の中で消えた地名について、古代から現代に至るまで、その時代ごとの背景の中で詳細に考察。京都史の新たな一面を浮かびあがらせる。９名の本会常任理事が執筆。

当研究会のホームページをご覧下さい

Yahoo などで「kyotochimei」と入力するとメニューがヒットします。各種情報を定期的に更新できるよう努めます。「コンタクト」のページから

当研究会への要望や意見を書き込むことができますので、ぜひご活用ください。

会費納入の依頼

今年度、または今年度を含む過年度の会費が未納の方は至急納入方、よろしくお願いします。

納入状況のお問い合わせは事務局まで。

原稿募集

◇**会誌『地名探究』**　４月刊行

ご寄稿の際には、会誌『地名探究』14 号の「原稿募集要項」をご参照ください。

◇**会報「都藝泥布」**締め切り　随時

発行は「総会」「地名フォーラム」の一ヶ月前

編集後記

『都藝泥布』第 56 号をお届けする。時あたかもプーチン氏が山口県長門市に来訪した。

ちしまのおくも、おきなはも、

やしまのうちの、まもりなり。

いたらんくにに、いさおしく、

つとめよわがせ、つゝがなく。

聞き覚えがない方が多いと思うが、唱歌「蛍の光」の４番の歌詞である。稲垣千穎(いながきちかい)の作詞、明治 14 年に小学唱歌集初編に掲載された時のもの。現在の国境線とはかなり違う。領土拡張の歴史とともに歌詞が文部省により順次改変された歴史をもつ。

千島の奥も 沖縄も 八洲の**外の** 守りなり

（明治初期の案）

千島の奥も 沖縄も 八洲の**内の** 守りなり

（千島樺太交換条約・琉球処分による領土確定を受けて）

千島の奥も **台湾**も 八洲の**内の** 守りなり

（日清戦争による台湾割譲）

台湾の果ても **樺太**も 八洲の**内の** 守りなり

（日露戦争後）

最後は破調となって、いかにも歌いづらい。地名は単なる情報ではなく、美醜を超えてでも盛り込むべき国家主権の記号であった。領土の「領」は「しる」と訓読できる。異性の名を「しる」ことは我がものとする意志の表明であり、名づけは領有を志向する。彼我を分ける見えない一本の線に目くじらをたてて大切なものを失うことのないよう、相互に努めたいものだ。地名の尊重は平和あってのことである。愚行は繰り返してはならない。（い）

京都地名研究会への入会案内

千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。

年会費	3000 円
賛助会員・理事	5000 円
家族会員	1000 円

事務局　お問い合わせ先

京都地名研究会事務局　入江　成治

E-mail：gerhalt5762@yahoo.co.jp